研究論文

国際的ジャーナリストの草分け、エンリケ・ゴメス＝カリーリョの塵の世を浮游する魂

Enrique Gómez Carrillo, pionero hispánico de crónicas internacionales, buscador errante de prestigio social

平　田　　渡
HIRATA Wataru

Esta tesis está compuesta de cinco capítulos que son : historia personal de Enrique Gómez Carrillo desde su nacimiento, su leyenda negra personal, mujeres atractivas que le sedujeron (Aurora Cáceres, Raquel Meller , Consuelo Suncín, etc.), *El Japón heroico y galante*, primer reportaje del país del sol naciente escrito por un autor hispánico después de San Francisco Javier y el nacimiento de un cronista internacional. Se trata de aclarar hasta qué punto era esnob Enrique Gómez Carrillo y cómo llegó a ser un periodista internacional reconocido.

キーワード
エンリケ・ゴメス＝カリーリョ（1873 グアテマラ・シティ～ 1927 パリ）、生いたち、黒い伝説、アウローラ・カセレス、ラケル・メラー、『星の王子さま』、コンスエロ・スンシン、『誇り高く優雅な国、日本』

生いたち

エンリケ・ゴメス＝カリーリョは、1873年2月27日、中米グアテマラのサンティアゴ・デ・ロス・カバリェロスという町に生まれる。父親はアグスティン・ゴメス＝カリーリョ、母親はホセフィーナ・ティブレ。教養ゆたかな作家で教師だったアグスティンは、立派な書斎を持っていた。そこには、スペインの古典作品がたくさん並んでいた。それに比べると、19世紀フランスの作家が書いた作品はわずかしかなかった。外国人の血筋をひく、金髪で碧眼だったホセフィーナは、きちんとしたフランス語を話した。少年の頃から始まったエンリケのフランス文化や文学に対する愛着は、おそらく彼女から受け継いだものにちがいない。

初等教育は受けたけれど、中高等教育は修了していない。校則が合わなかったようで、中途退学しているのである。

1888年（15歳）、店員として働きはじめる。

翌年、ジャーナリズムの道に入る。インパルシアル新聞にホセ・ミリャ＝イ＝ビダウーレという作家についての記事を書いたのである。

この年の九月、オピニオン・ナシオナル新聞の編集部員に任命される。任命したのは、当時大統領として独裁政を敷いていたマヌエル＝リサンドロ・バリーリャス将軍［1844ケツァルテナンゴ～1904メキシコシティー。在位1886～92］であった。エンリケ少年の文学的な才能を利用しようと考え、国家お抱えの記者に仕立てたのである。これ以降、ゴメス＝カリーリョは、グアテマラ政府からヨーロッパ留学のための奨学金や助成金をもらいながら、母国が発展をとげていることを宣伝するための、いわば御用作家的な活動に従事することになる。

1891年（18歳）、大統領の肝煎りで奨学金をえてスペインに渡り、マドリードでさまざまな新聞に記事を書いて自国のための広報活動をおこなう運びになった。けれども、じっさいにはマドリードなど眼中になく、知り合ったばかりのニカラグアの詩人ルベン・ダリーオ［1867メタパ（現ダリーオ市）～1916レオン。ニカラグア生まれの詩人、外交官。詩的言語と韻律の改革、主題の革新、耽美主義、異国趣味を特徴とするモデルニスモ（近代派）運動の推進者。スペイン詩に大きな影響を及ぼす。代表作『青』1888、『俗なる詠唱』96、『生命と希望の歌』1905］の勧めに従ったかたちで、パリに赴いたのである。

若き日のゴメス＝カリーリョは、おのれが書いた作品を売りこむために、当時ルベン・ダリーオが勤めていたグアテマラの新聞社に姿を現わしたのだが、そのときエンリケ青年にパリにゆくように諭したのだという。パリが放つ磁力に惹きつけられ、うっとりとなっていたルベン・ダリーオは、のちにゴメスー＝カリーリョに招かれるかたちでパリにたどり着き、憧れの都に足跡を印すことになる。以下は、かれの言葉である。

「ぼくは子供の頃からパリのことを夢に見ていた。作文を書いたときは、パリを知らずして死ぬことだけはお許しください、と神に祈ったほどである。パリはぼくにすれば楽園のようなところであった。そこではこの世にありながら、幸せの香気にひたることができるのだ（…）。そんなわけで、サン・ラザール駅でパリの土を踏んだとき、聖地を見つけたような気がしたものである」[1)]。

パリでは、グアテマラ政府からの援助が続いているあいだは、ボヘミアン的な生活というよりもダンディズムを気取った暮らしをすることができた。けれども、やがて政府による歳出削減の方針が固まると、助成金の仕送りが途絶えるようになり、マドリードに移り住むべしとの連絡が入った。1891年の暮れも押し詰まった頃、エンリケは、やむなく命令に従って、フランス人の恋人アリス・フルヴィルとともにスペインの首都に赴いたけれど、パリのような新しい芸術が生まれつつある空気は望むべくもなかった。のちに、文芸サロン“ポンボ„を主宰し、内外の作家や詩人、画家、音楽家、芸術家を招いて、マドリードをベル・エポックのパリのような芸術の都に変えようと奮闘した異才、ラモン・ゴメス＝デ＝ラ＝セルナはまだ赤児にすぎな

かったのである。

1895年（22歳）イスパノ（スペイン系）アメリカに旅行に出かけるが、以後、世界を股にかけて活躍する国際的ジャーナリストのさきがけ的な存在となる。たとえば、1900年にはロンドン、05年にはインド、中国、日本、06年にはベルギー、ドイツ、08年にはギリシャ、10年にはエルサレム、12年にはエジプト、14年にはアルゼンチンというぐあいだった。その結果、厖大な量のルポルタージュ記事や紀行文が生まれた。同時に、かれの作品はコスモポリタン的な性格を帯びてゆくことになった。それは、ルベン・ダリーオが率いるかたちで展開された、モデルニスモ（近代派）運動の特徴のひとつでもあった。

南米のパリといわれるブエノスアイレスまではるばる出かけた1914年（41歳）には、第一次世界大戦が勃発している。いち早く、連合国支持を宣言したゴメス＝カリーリョは、従軍記者として戦地におもむき取材を敢行した。このことについては、のちに詳述する。

黒い伝説

出る杭は打たれる、喬木に風強しというが、ゴメス＝カリーリョがヨーロッパで活躍し始めると、故国グアテマラでは、それをやっかむ連中が、誹謗中傷の、不穏なうわさを流すようになった。いわく、文字が書けるようになる前から飲酒していた。いわく、グアテマラで最初の麻薬中毒患者である。いわく、外国人の踊り子の乳房をもぎ取った。いわく、ルベン・ダリーオから受けた恩を仇で返すように、かれを利用したり、かれの家具を質に入れたり、金を巻き上げてパリのアパート代を払ったりした。いわく、当時のバリーリャス大統領は、ほかの者に与えるはずの奨学金を廻してスペインに留学させたけれど、かれはマドリードからパリに逃げた、というのである。

こうした黒い伝説が広まった背景には、ゴメス＝カリーリョ自身が、生国のグアテマラに対して軽侮の念を抱いていた、という事情がある。加えて、独裁者エストラーダ＝カブレーラ［マヌエル・エストラーダ＝カブレーラ。1857～1924。グアテマラ大統領、在位1898～1920。グアテマラ人のノーベル賞作家ミゲランヘル・アストゥーリアスの代表作『大統領閣下』（1946）のモデルと言われている］との癒着が取り沙汰されていた。経済的な援助をうけただけではなく、在パリのグアテマラ領事職とひきかえに、一時的ながら文化を擁護するような姿勢を見せていた大統領を支持するプロパガンダめいた原稿を書いた。とくに、火のないところには煙は立たぬという思いを深くさせられたのは、偽名でエストラーダ＝カブレーラ批判の記事を書いたあと、署名入りでそれに反論する文章を載せた、というゴンサーレス＝アルカントゥーの指摘[2)]である。そうやって、大統領の歓心を買ったばかりか、パリ滞在に充てる資金を稼いだのである。

また、スペインでは、かれの書いた本がよく読まれたが、本国でははかばかしくなく、評価についても意見が分かれていたのである。とりわけ、金に困ったあげくとはいいながら、アル

ゼンチン国籍を取得してパリ駐剖領事に納まったときには、世評は地に堕ちた感があった。

ふれなば落ちん風情の女人たち

（1）ペルー大統領令嬢、アウローラ・カセレス

『愛と哀しみと悪徳について』（1898）、『感傷的なボヘミア』（99）、『驚くべきことども』（同）、『愛の福音書』（1918～22）といった小説の中で、ゴメス・カリーリョは好んで魔性の女を取りあげているが、現実の生活においても、マタ・ハリをはじめとする蠱惑的な女に惹かれた、色恋沙汰の絶えない作家であった。

まず、フランス人のアリス・フルヴィルを恋人にしてマドリードゆきに同行させたことは、すでに述べたとおりである。

ほかに、結婚まで進んだ三人の女性がいた。そのうちのひとりは、ペルーのカセレス将軍兼大統領の令嬢で作家だったアウローラにほかならない。1906年（33歳）に結婚し、翌年には離婚したけれども、心のかよった関係は生涯にわたって続いた。したがって、ゴメス＝カリーリョがマタ・ハリ事件に巻きこまれたとき、かれが高級娼婦兼スパイのことを官憲に密告し、逮捕の片棒をかつぐような邪なことをするわけがない、といって弁護する側に廻ったのである。けれども、真偽のほどは定かではないが、マタ・ハリが、スペイン側バスクのイルンと国境を接する、フランス側バスクの町アンダイで身柄を拘束され、そのあと死刑に処せられたのは、売名行為を狙ったゴメス＝カリーリョの仕業だという説が、今でもまことしやかに語り伝えられている。

（2）映画『街の灯』の主題歌「すみれの花売り娘」で一世を風靡した歌姫ラケル・メラー

社会的な地位のある閨秀作家のあとは、1919年（46歳）のことだが、当時、歌謡の歌手として人気を集めていたラケル・メラー〔1888タラソナ～1962バルセロナ。本名フランシスカ・マルケス＝ロペス。ついでながら、メラーMellerとは、ドイツ国籍だった初恋の相手の姓にちなんだもの〕と結婚した。けれども、この結婚も永くは続かず、三年後の1922年には破綻を来たすことになった。しかし、その間、ゴメス＝カリーリョは、チャップリンの映画『街の灯』の主題歌「すみれの花売り娘」*Violetera*を歌って流行させたばかりか、けっきょくは破談になったけれど、映画出演の話まで持ちあがっていた妻ラケルのために、当時のスペインの知識人たちがオマージュをささげるように仕向けた冊子を作ることに成功している。

手許にその復刻版[3)]があるが、表紙には、フランス印象派ふうの魅力的な絵画で知られるホアキン・ソローリャの筆になるラケル・メラーの肖像があしらわれている。

ラケル・メラー頌に加わったのは、ハシント・ベナベンテ（劇作家、1922年ノーベル文学賞）をはじめ、マリアーノ・ベンリィウーレ（彫刻家）、マヌエル・マチャード（詩人）、グレゴリ

オ・マルティネス＝シエラ（作家、劇作家）、アルバレス・キンテーロ兄弟（劇作家）、アルマンド・パラシオ＝バルデス（作家）、マリア・ゲレーロ（舞台女優）といった当時の文壇や演劇界の錚々たる顔ぶれ、総勢四十一名であった。けれども、質量ともに、いちばん熱烈な讃辞を寄せているのは、ゴメス＝カリーリョ自身にほかならない。

ここで、もう少しラケル・メラーについてふれておこう。かの女は、1911年（23歳）に、バルセロナのアルナウ劇場で歌手としてデビューしている。一躍有名になったのは「すみれの花売り娘」と「レリカリオ」*Relicario* という歌謡曲を持ち歌にしたときである。いずれもホセ・パディーリャという作曲家が手がけたものだった。

ラケル・メラーが一世に鳴りひびいたのは、1920年代から30年代にかけてのことだったけれど、この時代に流行した歌のジャンルがクプレ cuplé あるいはコプラ copla と呼ばれるものなのである。仮に歌謡曲と訳しておくが、ともあれ、このジャンルを一般大衆向けの水準から芸術の領域まで高めたのがラケル・メラーだと言われている。

ゴメス＝カリーリョと結婚していた1919年から22年のあいだの三年間は、かの女がパリやアルゼンチン、ウルグアイ、チリに公演に出かけて、めざましい成功を収めた時期と重なっている。この頃は、まだ無声時代だったけれど、『気高きすみれの花』（22）、『カルメン』（26）という二本の映画に出演している。これらに惹きつけられたチャップリンは、やがてラケルに『街の灯』出演の話を持ちかけることになった。残念ながら、出演は実現しなかったが、持ち歌は主題歌として採用され、世界中に知れわたり、いまでも愛唱されている。

さらに27年には、ニューヨーク、フィラデルフィア、シカゴ、ボルティモア、ロサンゼルスをめぐるアメリカ合衆国コンサートツアーをおこない、好評を博した。ラケル・メラーが、スペイン女性が礼装するとき頭にかぶる、黒レースのマンティーリャ姿で、「タイム」紙の表紙を飾ったのは、その頃のことにほかならない。

30年代はフランスで暮らした。人気、収入とも、アルゼンチン・タンゴの往年の名歌手カルロス・ガルデルや、シャンソン歌手のモーリス・シュヴァリエに勝るとも劣らない大スターにのし上がっていた。かの有名な舞台女優サラ・ベルナールをして「天才肌」と言わしめるほどの歌唱力をそなえていたようである。

しかし晩年は、忘れられたままバルセロナでひとり暮らしをする。50年代に入り、サラ・モンティエール主演で『最後の歌謡曲』（57）と『すみれの花売り娘』（58）という映画が大ヒットすると、かつての名声を取り戻そうとするが、果たせず、62年にひっそりと天国に召された。現在は、モンジュイックの丘にある墓地に眠っている。

（3）星の王子さまに登場するわがままなバラの花のモデル、コンスエロ・スンシン

のちに、サン＝テグジュペリ夫人になるエル・サルバドル生まれの、コンスエロ・スンシン［1901～79。最終的な名前は、コンスエロ・ド・サン＝テグジュペリ伯爵夫人。22年、メキシコ人リカル

ド・カルデーナスと結婚するも、数ヶ月で先立たれ未亡人に。26年、ゴメス＝カリーリョと再婚するも、一年で死別しふたたび未亡人になる］と、ゴメス＝カリーリョが結ばれたのは、26年である。翌年（54歳）に、かれはあっけなく亡くなるので、まことにはかない結婚生活だったが、かの女はパリとニースにあった家を相続した。

コンスエロはみずからの生いたちについては多くを語ろうとはしなかったけれど、以下のことは分かっている。すなわち、中米の小国エル・サルバドルの、火山のふもとにあるアルメニアという村において、母親が地震のせいで早く産気づいたために、近くに住む呪術師（シャーマン）の助けを借りて呱々（ここ）の声をあげた。生後数日間、コンスエロの世話をしたシャーマンは、「井戸の底から雲を捕まえる術」をさずけたという。そして、父親は広大なコーヒー園を営んでいたらしい。

一方、成人して以降のことは比較的よく知られている。フランスと中南米諸国をゆき来しながら、どうやら有名な作家ばかりを選んで交遊したふしがあるのだ。

20年代はメキシコで暮らした。そのとき、まず国立自治大学（UNAM）学長や文部大臣を務め、のちに大統領候補まで登り詰める要人で、当時のメキシコ文化のルネサンスの担い手のひとりといわれた、ホセ・バスコンセーロス［1882オアハカ～1939メキシコシティ。政治家、作家］と知り合い、恋仲になっている。しかしながら、かれは所帯持ちであるばかりでなく、ラテンアメリカ文化の救世主（メシア）的な存在でもあったので多忙をきわめた。一時亡命していたパリにコンスエロを残し、南米に講演旅行に出かけたのはいいが、そのひまに、かの女は「見ること、感じること、生きること、そして不注意な人間を利用することに、長けた者に対して、パリが約束する輝き、その輝きを象徴していた人物、グアテマラ人のゴメス＝カリーリョのもとに走り、結婚してしまったのである」[4)]。

ラテンアメリカ文学に造詣が深いオラシオ・ゴメス＝ダンテス氏に言わせると、ゴメス＝カリーリョとは次のような男であった。少し長くなるが、かれの言葉を引く。ゴメス＝カリーリョは「18歳の誕生日にはシャンゼリゼ大通りを歩いていると公言し、それを実現するような人物だった。ヴェルレーヌやヒメネス［筆者註　フアン＝ラモン・ヒメネス。スペインの詩人。1881モゲール～1958サン・フアン、プエルトリコ。『石と空』という詩集に代表されるが、純粋詩をめざす改革を推進し、スペインや中南米の詩人たちに影響を及ぼす。56年ノーベル文学賞］と親交があったかれは、友人のルベン・ダリーオを旗手とするモデルニスモ運動の輝かしい世代に属する一方、売文の徒でもあった。

かれは、祖国のエストラーダ＝カブレーラ大統領のような独裁者や、アルゼンチンのイリゴーイェン大統領のような不用心な政界の大物に近づき、みずからの文筆でかれらの名声を高めていると見せかけて、偽りの決闘までおこない、報酬をせしめて生きていたのである。また、新聞記者としての才覚を活用し、スペインの宰相ミゲル・プリモ＝デ＝リベラをはじめとするヨーロッパの政治家を手玉にとり、金をひねり出した。

かれは、ペンの力のみならず、口達者で、ハッタリの場合もあったけれど、じっさいに決闘

に及ぶこともあったので、オスカー・ワイルドのような世紀末にパリに在住していた有名人の注意を巧みに惹きつけた。ダヌンツィオが、かれの訃報に接して、『ゴメス＝カリーリョが死んで、愛も死んだ』と洩らした話はよく知られている。また、メーテルリンクは、『かれは、ひとつの人生の中で三つか四つの人生を経験するように命の火を燃焼させた。その点、ふつうの人間よりも数倍も人生を知っていた、イタリア・ルネサンスの芸術家を彷彿とさせるところがある』と語った。

晩年、アルゼンチンに帰化したゴメス＝カリーリョは、世界各地をめぐり、誕生まもない国際的ジャーナリストの名を恣（ほしいまま）にした。日本に関するもの三冊をふくめて数十冊のルポルタージュや紀行を上梓した。『誇り高く優雅な国、日本』[5] ほか〔筆者註　具体的には『マルセイユから東京へ』と『大和魂』がある〕を書いたせいで、スペイン語圏のピエール・ロチと称された」[6]。

話を元に戻せば、コンスエロがバスコンセーロスを棄てて、ゴメス＝カリーリョのもとに走ったのは、つねに名利を求めることに余念がない性格に由来しているのである。かの女は、バスコンセーロスに宛てた手紙の中で、おのれの運命について、次のように述べている。「あたしの運命は、そのひとが人生の浮き沈みに巻きこまれるとしても、大人物のあとを追いつづけることです。たとえあたしが単なる愛人や奴隷でしかないとしても。凡人がまるまるひとり手に入るより、大人物が五分の一いる方があたしには価値があるのです」[7]。

ゴメス＝カリーリョが亡くなって、ほとぼりが冷めた頃、コンスエロは、寡婦年金を請求するためにアルゼンチンに赴く。夫が在パリのフランス領事を務めていたという事情による。

ちょうど同じ時期に、バンジャマン・クレミューもブエノスアイレスを訪れていた。当時フランス・ペンクラブの会長だった作家クレミューは、講演旅行に来ていたのだ。かれの紹介のもと、コンスエロは、サン＝テグジュペリと知り合うことになる。それは1930年9月のことであった。

サン＝テグジュペリはというと、前年の10月以来、郵便物を運ぶ航空会社であるアエロポスタル社（前身はラテコエール社。本社はトゥールーズ）の支社、アエロポスタル・アルヘンティーナ社の支配人としてブエノスアイレスに赴任し、仕事のかたわら取材しながら『夜間飛行』を執筆していたのである。

すでにゴメス＝カリーリョ未亡人になっていたとはいえ、まだ29歳であったコンスエロは、『サン＝テグジュペリの生涯』の著者、ステイシー・シフによれば、「クレミュー自身も、この若い女性の明るさや象牙色の肌、揺れる瞳、漆黒の髪に魅せられていた」[8] という。かの女の「友人は画家や作家で、一部は夫の遺してくれた人たちだった。趣味は絵画と彫刻で、暮らし方は奔放そのものだった。ディディエ・ドーラ〔筆者註　アエロポスタル社の航空路線開発主任。サン＝テグジュペリとともにブエノスアイレスに赴任〕は、コンスエロについて、生まれ故郷の火山の国と似通った女性だと語っている。気性が激しく、向こう見ずで、陽気で、気まぐれで、はじけるようなエネルギーの女性だったのだ。ヨーロッパ的というよりは、もちろんラテン的で、そ

れは南米一のヨーロッパ的な都市ブエノスアイレスにあっても目を惹いたことだろう。見た目はともかく、声はサン＝テグジュペリの耳にエキゾティックにひびいたに違いない。ハスキーで、華やいだフランス語を話し、巻き舌のｒの音が際立った。気まぐれという言葉を抜きにかの女を語れるひとはいない。この言葉は、心ここにあらずという評価が、サン＝テグジュペリについて廻ったように、かの女にいつまでもつきまとうのである」[9]。

コンスエロが、『星の王子さま』に登場する、わがままなバラの花のモデルであることは、サン＝テグジュペリとの14年にわたる結婚生活をふりかえった告白録『バラの回想』[10] でかの女自身がのべているとおりである。

第8章から第9章にかけて姿をあらわすバラの花は、「どこからか飛んできた種が芽を出したものだった」[11] が、おしゃれで、見栄っぱりなうえに、気むずかしい性格だった。そして何よりも、わがままで、王子さまに手を焼かせることになる。

たとえば、風があるので衝立(ついたて)をもってきてと言ったり、夜は冷えるからガラスの蔽(おおい)いをかけてとせがんだりするのである。それでも、まじめな王子さまは、「あのころは何もわかっていなかったんだ。かの女の言葉ではなくて行動で判断するべきだった。かの女はぼくの星を、いい匂いで満たしてくれた。ぼくの生活に灯をともしてくれた。ぼくは逃げ出したりしてはいけなかったんだ。つまらない見せかけの裏にあるやさしさをちゃんと理解するべきだった。花のすることは矛盾だらけだ。それにしても、ぼくは幼すぎて、花を愛するということがわからなかった」と本音を洩らす。

王子さまの方も、現実の生活においては、バラの花に負けず劣らずわがままなところがあった、と伝えられている。バンジャマン・クレミューに紹介されたその夜、サン＝テグジュペリは、コンスエロを、ブエノスアイレスを流れるラプラタ河上空の、遊覧飛行に誘った。コンスエロは、友人たちも同乗させるという条件つきで受け容れる。友人たちは客室に、かの女自身は操縦室に乗りこみ、サン＝テグジュペリとふたりきりになった。ラプラタ河にさしかかったとき突然、サン＝テグジュペリがキスを求めてきた。コンスエロは、わたくしは未亡人ということもありますし、むりにキスはしたくありません、と言って断わる。すると、サン＝テグジュペリは、「キスしたくない理由はわかっています。ぼくが醜男(ぶおとこ)だからでしょう」と拗(す)ねたというのである。そればかりか、「よし、それなら、これからラプラタ河に突っこんで、乗っている全員を溺れ死にさせてやる」と涙ながらに凄んでみせたので、コンスエロは怖くなって、思わずサン＝テグジュペリの頬にキスをした。そして、「あなたは醜男なんかじゃないわ」と言ってなぐさめた。おかげで、全員ぶじに飛行場へ戻ることができた。そうした有名な逸話が遺されている。

それというのも、コンスエロは、ゴメス＝カリーリョの若き未亡人となって以来、イタリア人作家のダヌンツィオや、日本人画家の藤田嗣治、『西洋の愛』の著者として高名なドニ・ド・ルージュモンといった友人たちに、つぎつぎに言い寄られていたのである。サン＝テグジュペ

リがつい事を急いてしまったわけは、そんなところにもあったように思われる。

アルゼンチンで知り合ってから八ヶ月ほどたった1931年4月、コンスエロはサン＝テグジュペリ夫人となる。

けれども、結婚生活は決して順風満帆というわけにはいかなかった。サン＝テグジュペリは、幸い死には至らなかったけれど、二度の飛行機事故を起こしたし、第二次世界大戦の戦火がしだいに燃えひろがっていったからである。それにともない、住居もパリからニューヨークに移した。サン＝テグジュペリが『星の王子さま』を執筆するのは、このニューヨークに長逗留したときにほかならない。夫婦それぞれに分かれてニューヨークに到着したあと、同じ建物の中にあるちがうマンションを借りて暮らしたのだった。

もともと夢想的で想像力ゆたかな感性をそなえていたコンスエロは、二十年代半ばにうぶ声をあげたシュルレアリスム運動にかねてから惹きつけられていたが、かの女のマンションにはやがて、サン＝テグジュペリを嫌っていたアンドレ・ブルトンをはじめ、イヴ・タンギー、アンドレ・マッソン、マックス・エルンスト、マルセル・デュシャンといった親しい友人たちが集うことになった。コンスエロは、のちにそうしたシュルレアリストたちを魅了する未来小説『オペド』を書くことになるけれど、かの女の本性は、著名人からちやほやされる生活から離れられようにも離れられなかったのである。

ザヴィエル以来の、スペイン語圏の作者による、日本探訪記『誇り高く優雅な国、日本』

ゴメス＝カリーリョは、フリオ・セハドール〔1864サラゴサ～1927マドリード。スペインの文芸評論家、言語学者〕に宛てた手紙の中で、おのれが書いた本の中では旅行記が気に入っている、という意味のことを述べたあと、こう真情を洩らしている。「自著については、遥か遠く離れた国々を取りあげた本以外は、あまり評価していません。いちばんが『エルサレムと聖地』で、つぎが『永遠なるギリシャ』、それに『誇り高く優雅な国、日本』、『ブエノスアイレスの魅惑』とつづきます。〔中略〕これまでスペイン語で書かれたものはない、新しいジャンルを生み出すことができたのではないか、と自負しています。〔中略〕それにしても、スペイン語圏のピエール・ロティと呼ばれることほど嬉しいことはありませんね」[12)]。

ゴメス＝カリーリョが集中的に紀行文をものする旅は、1905年（32歳）、インド、中国、日本を訪れたときから始まった。以来、ほぼ10年間にわたって、アジア、極東、ギリシャ、中近東を股にかけ、14年（41歳）に出かけたアルゼンチンへの旅で締めくくられている。

来日した1905年（明治38年）は、ちょうど日露戦争が終わったあとだった。元上智大学教授、小林一宏氏によれば、「白人、それも列強のひとつ帝政ロシアとの戦争に勝った黄色い肌の人間とその国。これを自分の目で確かめ、その実像をヨーロッパに知らせる。そして勝因を見出し、自分を納得させる。白人カリーリョの来日の最大の動機がこの辺にあった、と考えるこ

とにさほど無理はないように思われる」[13)]。

そうした動機のもとにつづられた本邦の印象記『誇り高く優雅な国、日本』は、「東京」「吉原」「雄々しき魂」「太刀」「社寺」「サムライ」「洗練された精神」「ハラキリ」「詩歌」「女性」「山水」「貧困」「名誉の規範」「笑い」という全十四章から構成されている。特筆に値するのは、ゴメス＝カリーリョの日本を見る眼の確かさ、偏りのない公正さであって、これには舌を巻かざるをえない。たとえば、「東京」に見られる大和撫子についての記述は、以下のとおり。

「(…) ほっそりした体つきに、血の気の少ない薄く透けるような琥珀色の肌、首筋に浮きでている細い血管。顔のかたちは完璧な卵形。目は大きくはないが切れ長で、そのはなはだしく細く長い目には肉感的な甘美さがあり、古(いにしえ)の日本の歌人たちが和歌の中で、女性の瞳を男性の気をそそらせる媚薬とくらべている気持ちがわかる気がした。華奢な手の指は青白く透きとおるようだ。口許はといえば、たえず笑みを浮かべて半開きになっており、そのしっとり潤った唇から米粒のような上品な歯並びがのぞいている。わたしの目の前にあらわれたこの女性は、汽車でいっしょだった娘たちが着ていた灰色の無地の着物とは違い、薄い黄色地に白百合を一面に描いたものを身につけていた。まるでそこだけ春が来たようだった。ボッティチェリの『春』ほどの偉大さや輝きはないが、心をそそられる点では勝るとも劣らない。わたしは茫然とかの女に見とれた」[14)]。

児嶋佳子氏の日本語がすばらしいことも手伝っているのであろうが、ゴメス＝カリーリョの文章力も只ものではないことを思わせるに十分である。とくに女性を取りあげるときの描写は、恋多き作家ならではの色艶を帯びており、読者の注意を惹きつけて放さない。ここで、もう一箇所「ハラキリ」から引いてみよう。

「日本は西洋化したといわれる。たしかに外見はそう思われる、けれども内奥は、洗練された、特殊かつ高潔にして雄々しく、はなはだ寛容にして謎めいた東洋が存在しつづけている。ある詩人にいわせると、『ハラキリが存続するかぎり、古来の日本が生きつづけるにちがいありません』。じっさい、ハラキリは今も行なわれているのだ。(中略) ハラキリは武士道の規範の根本をなすものであり、武勇と自尊心、名誉と尊厳だけではなく、自己犠牲と無私の精神をあらわしている以上、すべての規範の中でいちばん美しく、いちばん厳しいものであろう」[15)]。

こうした切腹に関する言及からも分かるように、ピエール・ロティやラフカディオ・ハーン、B・H・チェンバレンといった有名な先駆者のみならず、無名の研究者が書いた、日本関係の資料を、ゴメス＝カリーリョがよく渉猟していることが窺われる。したがって、『誇り高く優雅な国、日本』は、外国人による日本探訪記として第一級の、看過できない価値をそなえていると言っていいだろう。

国際的ジャーナリストの誕生

パリ時代のゴメス＝カリーリョは、公的には新聞記者、特派員、外交官、紀行作家として八面六臂（ろっぴ）の活躍をくり広げて注目を集める一方、私的には多彩な恋愛遍歴に憂き身をやつしながら、自由気ままな、ミュルジュール［（ルイス・）アンリ・ミュルジュール。1822～61。フランスの作家。代表作『ボエームの生活情景』はプッチーニのオペラ『ラ・ボエーム』の原作］ふうのボヘミアン的な暮らしを愉しむ。かれは、『魂のめざめ』『ボヘミアン暮らしを謳歌して』『マドリードの惨状』という回想録三部作を上梓しているけれど、その第二作の中でこう告白している。

「ぼくは、パリのボヘミアンたちの暮らしにどっぷりと浸かっていた。ありていに言えば、百万長者のような、お伽噺に登場する人物のような大尽風を吹かせていた。サン・ジェルマン大通りにあるリマ・ホテルの三階に宿泊し、レストラン・ポリドールで昼食をとっていた。夕方には、これは習慣となっていたことだけれど、カフェ・ダルクールでアブサン酒をひっかけ、モン・ルージュから東駅界隈へと繰り出したものだった」[16)]。

そうしたゴメス＝カリーリョは、ドレイフュス事件を皮切りに、1899年から1920年まではスペインのリベラル新聞の、1920年から亡くなる27年までは同ABC新聞の特派員として、毎日のように通信欄に記事を書き、フランスの自由でのびやかな空気を伝えた。お好みのテーマは、パリのファッション、風俗習慣、文学、芸術、自動車、ボヘミアン的な暮らし、芸能界のゴシップなどであった。ゴメス＝カリーリョの真骨頂は、そうした通信欄のために書いた署名記事にあるといって差し支えない。けれども、そこには、マックス・エンリケス＝ウレーニャも指摘しているように、社会的な感性が欠如していることも確かである。

「かれは、倫理的な後ろめたさや懸念を感じない男であったし、国際的な政治について言えば、懐疑主義者で、アメリカ大陸の運命にたいしてはまったく関心を示さなかった」[17)]。

ところが、1906年に出た『今日のロシア』、それに15年から18年にかけて矢継ぎ早に本になった、『戦況報道記事』、『戦場と焼け野原』、『悲劇のきらめき』、『悲劇のさなかに』、『塹壕のなかで』、『部隊の武勲』、『殉職の地』といった第一次世界大戦の戦争記事の集成を見れば、そうとも言い切れないことが分かる。

『今日のロシア』は、1905年、日露戦争が終結したあと、第一革命が勃発し、ニコライ二世が幽閉された場面から始まるロシア国内事情の生々しいルポルタージュにほかならない。これは、いずれ始まるロシア革命の予兆を嗅ぎつけた書物として評価が高い。

いっぽうそれ以外は、14年から18年にかけて、マドリードのリベラル新聞とブエノスアイレスのプレンサ新聞の従軍記者として、戦争の最前線に派遣されたとき書いた報道記事にほかならない。

『戦場と焼け野原』の序をしたためたのは、当時のスペイン文学の重鎮ペレス＝ガルドス［ベニート・ペレス＝ガルドス。1843ラス・パルマス・デ・グラン・カナリア～1920マドリード。スペイン19

世紀リアリズムを代表する作家。主要作品『フォルトゥナータとハシンタ』『ナサリン』『トリスターナ』]だったと聞くと、取り合わせの不思議さに首をひねらざるを得ない。じつは、社会派的な側面をそなえていたペレス＝ガルドスは、ゴメス＝カリーリョが抱えるさまざまな矛盾を指摘しつつも、その個性に惹かれ、序文を書くことを引きうけ、絶讃を浴びせたのである。

ゴメス＝カリーリョ自身は、スペイン19世紀史を取りあげた小説シリーズ〈国史挿話〉で知られる、功成り名を遂げた、ペレス＝ガルドスの序があれば、おのれの作品に箔がつくことになるので、もちろん願ったり叶ったりだったにちがいない。けれども、内心では、モデルニスモ運動の主導者ルベン・ダリーオと同様、重厚長大な19世紀スペイン文学に厳しい批判を加えていたことも事実である。いわく、文章が複雑で、長ったらしく、単調で、我慢ならない、それに微妙なニュアンスやリズムに欠けている[18)]。そうした古めかしい文学を象徴する作家がペレス＝ガルドスだったのである。

さらに、第一次世界大戦をめぐる七冊の本については、フランス外務省に招かれ、ピクニック気分で出かけただけなのに、自己宣伝が功を奏し、ちゃっかりレジオン・ドヌール勲章までせしめた、とうがったことを言う向きもある。けれども、それはそれとして、これまでのゴメス＝カリーリョにはあまり見られなかった、社会派的な側面が現われていることは疑いを入れない。そのとき、国際的ジャーナリスト、ゴメス＝カリーリョが誕生したのである。

それにしても、ゴメス＝カリーリョという作家は、なんというけれんみ、なんという俗物根性、なんという娑婆っ気、反面なんという行動力の持ち主であろう。

註

1）Darío,Rubén : *Autobiogafía.* El Salvador, Ministerio de Educación, 1962, págs. 119-120.

2）González Alcantud, José Antonio : *Fez, a la luz inédita del modernismo hispano* en Gómez Carillo, Enrique : *Fez, la andaluza*, Edición facsímil. Granada, Editorial Universidad de Granada, 2005, pág. XX. S

3）Gómez Carillo, Enrique : *Raquel Meller.* Dibujos de Carlos Vázquez. Edición de José Esteban. Madrid, Reino de Cordelia, 2009. 元版は *La joya bibliográfica* という表題で Sociedad Española de Librería から出た。ただし出版年は明記されていないが、復刻版の編者 José Esteban は1919年から1922年のあいだと見ている。

4）オラシオ・ゴメス＝ダンテス「王子さまのバラ」北條ゆかり訳、174頁　（『ユリイカ　「詩と批評」』所収　東京　青土社　2000・7・1）

5）エンリケ・ゴメス・カリージョ『誇り高く優雅な国、日本』児嶋桂子訳　京都　人文書院　2001・11・20

6）オラシオ・ゴメス＝ダンテス『前掲書』　174～175頁

7）『前掲書』　176頁

8）ステイシー・シフ『サン＝テグジュペリの生涯』檜垣嗣子訳　東京　新潮社　1997・4・25　210

～ 211 頁

9）『前掲書』 212 頁

10）コンスエロ・ド・サン＝テグジュペリ『バラの回想　夫サン＝テグジュペリとの 14 年』 香川由利子訳　東京　文藝春秋　2000・11・10

11）アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ『新訳　星の王子さま』倉橋由美子訳　東京　宝島社　2005・7・11　43 頁

12）Martínez Cachero, José María : *Prólogo* en Gómez Carillo, Enrique : *Tres novelas inmorales*. Madrid, Ediciones de Cultura Hispánica. Agencia Española de Cooperación Internacional, 1995, pág. 23

13）エンリケ・ゴメス・カリージョ『前掲書』 6 頁

14）『前掲書』 21 頁

15）『前掲書』 112 ～ 113 頁

16）Martínez Cachero, José María : *Ob.cit.* págs. 18 ～ 19

17）González Alcantud, José Antonio : *Ob.cit.* pág. XXV

18）*Ob.cit*. pág. XXVI